巻 頭 言

コンピュータ利用の多様化？

計算機センター運営委員長　経済学部教授　小　山　明　宏

思いがけず計算機センター運営委員長を拝命してようやく半年となった。個人的にはコンピュータは大好きであるが，人に教える，あるいは更に大学全体としての情報処理教育を考える，などということになると，事は重大で，また話は別である。実際，学習院に来た十数年前と比べて計算機センターの様変わりには目を瞠るばかりで，少なくとも経済学部でのコンピュータ利用の実態は大いに改善されて（あるいは少なくとも変貌して）いる。同じことは経営情報論の分野でも当てはまる。特にここ数年のそれは甚だしく，２年間の滞独から帰国した時にはまさしく浦島太郎の気分になったものであった。それをひとことで言い表すのは誠に困難であるが，強いて表現すれば，月並ではあるが，『コンピュータ利用の多様化』ということになろう。

扱うテーマがより細かく，また，そのまますぐに実務に役立つトピックが歓迎されるという傾向は，どの分野でもおおかれすくなかれ最近見られる似通った状況だと思うのだが，特に経営学の分野ではそれが顕著である。情報処理の中でも特に経営学と関わりの深いトピックで、一時このような傾向が見られ，特に，新しいものが好きな日本人には，たとえば意思決定支援システム（ＤＳＳ）のインテリジェント化というテーマがもてはやされた時期があった。ところが，私が思うに，残念ながらこのテーマが，ＤＳＳ自体に関する研究を置き去りにして一人歩きし始め，一般性のない議論が横行して，ad hocなその場限りの「インテリジェントＤＳＳ」が際限なく「発表」され，論じられることとなった。そしてそこでしばしば使われた言い訳に「ＤＳＳの多様化」があったと記憶しているのである。

今の時点で現代のＤＳＳ研究をレビューしてみると，幸運にも（あるいは当然のことなのか）こうした方向での誤った「インテリジェント化」の議論はようやく影を潜め，再びＤＳＳ本体の議論及びＵＩのインテリジェント化など，一般性のある研究へと戻りつつある。すなわち，「多様化」は「個別化」や「特殊化」ではないのである。

コンピュータ利用における「多様化」は大いに結構であるが，そこには自ずから一般的な共通概念がなくてはならないであろう。情報処理教育，特に大学におけるそれは，このような，その場限りの「多様化」へ流されるものであってはならないと思う。つまり，コンピュータ利用に関する「本体」の知識を与えるのが大学での情報処理教育の本筋であり，我々が今進んでいる道がまさしくそれであると，私は考えている。